

萱

2020・5

風萱集

亀田虎童子

生^{なま}生^{なま}と生きて生きて九十四紫木蓮
ご馳走のことはさて措きさくら餅
春の風邪ならぬ奇病の白マスク
想望や鯨の肉をよく噛んで
遠目にもつらつら椿二つ三つ

木村 嘉男

姉の訃の妹よりとどく蒲団干す
木の根明く偲び話のめぐりつつ
風花のかけゆく空や通夜あけぬ
見納めの桜かくしとなりにけり
慈溪比響信女たりとや辛夷咲く

松下 道臣

日方ぼこ悟つたやうな貌をして
用を足す伝ひ歩きの冷たかり
冬ざるる特急列車通過駅
耳順以後自分をとほすふぐと汗
誰しもが歩幅のかはる十二月

小島 良子

春の潮テトラポットの隙間まで
鳩の大きくなつて浮かび来る
ゆつくりと纜を解く春の船
閨日の波彼方より寄せて来る
手につつむ益子の湯呑春めきぬ



萱集

進選

春立つや刻み歩きの兄夫婦
球界の月見草逝く春まけて
春昼の妻に内緒の白日夢
甚六のおこぼれバレンタインの日
若やかになりぬ天皇誕生日

東京 ぶなかわのりひと

大くぬぎ芽吹くや雲の育ちゆく
春蘭のかきわけ蕾たしかむる
川波の光の中を山茱萸花
春愁や画鋏外れし世界地図
春塵に浮く街道の大けやき

埼玉 鈴木 愛子

青空に白木蓮の舞ふごとし
来し方へ心の遊ぶ春時雨
廃屋の庭とも知らず名草の芽
たうとつに湧き出でて舞ふ牡丹雪
春暁や病猫を抱き微睡みぬ

東京 谷田貝順子

糸編むそのうしろ影いま在さず
余寒なほ一骨片の闇深し
閑伽桶の籬のゆるみてかぎろひぬ
今生の名残とどむる薄霞
通ひ路のげんげんいまだ咲かざりき

東京 根來 隆元

水底の石のぬめりや春日さす
夕暮れて辛夷の花の浮かび咲く
戦災の銀杏の根元露の臺
近づけばクロモジの花盛りなり
開きしままの文庫本ある日永かな

東京 加倉井たけ子

飛び立てる鳥の羽音草青む
枝に来て鶯せわし声漏らす
梢から鳥の呼べりおぼる月
ほんのりと薫る梅花に行き戻る
梅落花地は満開の総絞り

東京 野村 宏

沈丁の香りの中でバスを待つ
うららかや曾孫とボール追うてをり
四つ角のぼんぼりの如白木蓮
スーパールの品薄となる余寒かな
生き生きと鯉の稚魚群れ春の水

東京 柳田 秀子